国立国語研究所学術情報リポジトリ

Words used by the magazine “Chūo-Kōron” in 1986

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石井, 久雄, ISII, Hisao メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001329

『中央公論』1986年の用語

石井　久雄

ISII Hisao : Words used by the Magazine "Chūo-Kōron" in 1986

要旨：国立国語研究所報告89『雑誌用語の変遷』のあとをうけて，雑誌『中央公論』の1986年一年の用語について，調査をおこなったので，結果の数量的な概要を報告する。

和語は従来とくらべて出現がもっともすくなく，外来語の増加傾向はつづいている。そのように変化しながらも，戦後の用語は，戦前の用語にくらべて，共通度がたかく，安定している。

今回の調査では原文をコンピュータファイルとして作成したので，それを利用して，出現したかたちでの語の長さをはかってみた。平均して，一語は，0.87個の付属部分をともない，3.67字で表記され，4.78拍からなる。

なお，単位にかかわることのあった問題を，二三かきとめた。
キーワード：『中央公論』　語彙の共通度　語の長さ

Abstract: Basing ourselves on the investigation reported by "NLRI Report 89: Changes in the Language of a Magazine", we examined the words used by the magazine "Chūo-Kōron" in 1986 and here present the outlines of the results.

The pure Japanese words are fewer in number than in the past 80 years, while the use of the loan-words from European languages continue to grow in number. Notwithstanding these changes, the whole word in post-war period remains more stable than in pre-war period.

We tried to measure the length of the words used, by means of a computer data file. On the average, each word presented 0.87 morphological element; the written forms used 3.67 characters per word and had a lenghth of 4.78 mora.

A few problems concerning the word units were taken up.
key words: Chuo-Koron, commonality of vocabularies, length of word

国立国語研究所報告89『雑誌用語の変遷』(1987年３月)の調査のあとをうけて，雑誌『中央公論』(中央公論社)の1986年一年分12冊の用語調査をおこなったので，結果の数量的な概要を報告する。今回の調査の主たる目的は，報告『雑誌用語の変遷』の調査を継続するという，調査すること自体にあり，この調査報告も，短報的であることをむねとして，数値のもつ意味あいについてはあまりたちいらない。しかしながら，以下の本文にところどころは指摘したように，多少なりとみとおしのよくなったことがらもあるであろう。

今回の調査は，主として遂行したのは報告者であるが，検査などに宮島達夫および高木翠の協力をえた。

なお，以下，報告『雑誌用語の変遷』の略称として，単に報告という。

１．『中央公論』1986年の用語の概要

報告にしめされた『中央公論』の用語の種種の結果などのうち，基本的なものについて，1986年のものをしめす。(pp.　)は，報告で，1976年までの結果がしめされている箇所である。

１.１．標本の抽出および処理の手順（pp. 10－11）

この調査は標本抽出調査である。雑誌『中央公論』1986年１－12月号合計12冊の本文・広告を母集団とし，標本は１／10ページを単位（ブロック）とする等間隔抽出を基本として，延べ語数が１万に達するまで抽出をつづけた。総ページ数4812に対して抽出ブロック数403となったので，標本抽出比は１／119である。

今回の調査では，コンピュータ処理を主とし，採集カードは作成しなかった。すなわち，標本を抽出したあと，つぎのような手順をとった。

(1)標本の原文を日本語エディタまたはワードプロセッサで入力し，そこに調査単位の境界の記号をも記入する。

標本原文は，まず仮名のみを入力し，そののちに漢字仮名まじりに変換し

た。日本語エディタまたはワードプロセッサによる入力では，原文の「よみ」がほぼそのままキーボードで実現されるので，それをすてることもあるまいとかんがえたのである。その利用の一結果は，２．にのべる。

(2)その原文をKWIC化し，五十音順整列（ソート）などもほどこして，検査のうえ，語彙表・表記表を作成する。その語彙表・表記表を，報告『雑誌用語の変遷』の語彙表・表記表と統合する。

この作業には，データベースソフトウエアを画面エディタのかわりに使用した。種種のデータの抽出や整列に便利であった。ここに呈示している数値も，おおくそれの機能を利用して算出したものである。

なお，今回の調査の準備作業として，報告の語彙表９表・表記表１表を統合したことについては，石井1989を参照されたい。

１．２．　1986年の語彙（pp. 38－50, 54－61）

延べ語数１万に対する異なり語数は4795である。この数値は，報告の８年と比較して，もっともおおきかった1976年の4936語につぎ，そのつぎにおおきかった1936年の4750語にちかい。この語数を，語種・品詞で分類してかかげる。延べについては，特に比率をしめすことをしない。かわりに，括弧内に，延べを異なりで除した数値，すなわち一語が出現する頻度の平均を，しめすこととする。異なりについては，括弧内に，百分率をしめす。

延べ	体	用	相	他	合計
和語	1602(3.06)	2445(4.98)	943(4.06)	194(4.22)	5184(4.01)
漢語	3035(1.44)	-	336(1.53)	6(2.00)	3377(1.45)
外来語	345(1.25)	-	7(1.00)	-	352(1.25)
混種語	614(1.12)	453(1.41)	20(1.18)	-	1087(1.23)
合計	5596(1.62)	2898(3.56)	1306(2.74)	200(4.08)	10000(2.09)

異なり	体	用	相	他	合計
和語	524(10.9)	491(10.2)	232(4.8)	46(1.0)	1293(27.0)
漢語	2112(44.0)	-	220(4.6)	3(0.1)	2335(48.7)
外来語	275(5.7)	-	7(0.1)	-	282(5.9)
混種語	546(11.4)	322(6.7)	17(0.4)	-	885(18.5)
合計	3457(72.1)	813(17.0)	476(9.9)	49(1.0)	4795

この1986年の数値が報告の８年とくらべてどのような位置にあるかをしるために，順位におきかえるならば，つぎのようになる。異なりは比率による。ただし，分類した結果の語数ないし比率が，報告の年でもこの1986年でもちいさく，参考にならないものは，空欄とする。

延べ	体	用	相	他	合計
和語	9	7	9	9	9
漢語	3	—	5		3
外来語	2	—			2
混種語	2	6	9		1
合計	2	9	8	9	

異なり	体	用	相	他	合計
和語	9	9	8	9	9
漢語	3	—	7		4
外来語	1	—			1
混種語	1	7			1
合計	1	9	8	9	

和語が，延べ・異なりともに，体・用・相・他のすべての類において，いちじるしく地位をひくくしている。和語の地位の相対的低下というようなことは，報告の８年では結論することができなかったが，ありうる傾向であるかもしれない。外来語・混種語が地位をたかめてきていたことは，数値がちいさいながら，報告の８年のなかでしられていたところである。体の類が相対的におおきくなってきていることも，報告の８年でしられていて，その傾向のつづいていることがたしかめられる。

1986年において出現頻度のおおきかった上位115語，換言するならば出現頻度８以上の語を，頻度順に表としてかかげる。見出しに（＊1)などとあるのは，注釈があることをしめし，注釈は，不体裁であるが，表にさきだってかかげる。見出しのつぎは，語種，分類すなわち『分類語彙表』の最上位１桁の番号，1986年における表記の種類である。語種・分類は，つぎの符号によってしめす。報告の表とくらべて，この符号そのものはおなじいが，符号をしめす順序がことなっている。

語種	W	和　語	混種語Hの	A	和語＋漢語
	K	漢　語	くみあわせ	B	和語＋外来語
	G	外来語		C	漢語＋外来語
	H	混種語		D	和語＋漢語＋外来語

分類	1	体の類
	2	用の類
	3	相の類
	4	その他

報告の８年の頻度もかかげ，またあわせて1986年の異なりおよび延べの累積もかかげる。頻度13のところにみられる「脳死」をのぞいて，いずれも，報告の８年のうちにあらわれたことがある。

「脳死」は，立花隆の記事「大型ノンフィクション　脳死」が，１月号から８月号まで毎号連載されたために，出現頻度もおおきくなったものとおもわれ，その記事における出現頻度が10である。その記事は，1986年１年間のうちで合計174ページすなわち『中央公論』全体の１／28の量をしめ，今回の調査でも全抽出ブロック数の１／27にあたる15ブロックが抽出されている。

くだんの「脳死」をのぞいては，ここにみえて当然といってよいものばかりであるようにみえる。ただし，報告の８年で頻度のおおきかったもので，ここにみえないものもある。表のあとに，付表としてつづけてかかげた27語は，報告の８年の頻度が平均８合計64以上の，上位101語のうちにあったが，1986年の頻度が７以下であったというものである。「いわゆる」は，1986年の標本には出現しなかった。付表での欄「記」は，報告の８年と1986年との合計９年における表記の種類の数をしめす。また，報告の８年と1986年との合計９年について，頻度が平均８合計72以上であるものは，95語となる。その

見出し注釈

(*1) 行。「いく」をふくむ。
(*2) 「…について」の「ついて」など。
(*3) 良。「いい」をふくむ。
(*4) わたくし。「わたし」は別。
(*5) 「いでる」をふくむ。
(*6) 「…において，…における」の「おいて，おける」など。
(*7) こんにち。
(*8) いっぽう。
(*9) ひとり。

語	種類	記	(出現頻度 06	16	26	36	46	56	66	76	86)	(累積 異なり	延べ)
る（有）	W	2 2	312	353	303	374	372	317	289	277	291	1	291
いる（居）	W	2 2	56	159	201	188	207	244	241	249	245	2	536
いう	W	2 3	146	170	172	179	132	310	249	207	195	3	731
こと（事）	W	1 2	134	166	176	181	201	193	183	150	178	4	909
する（為）	W	2 1	245	241	213	210	206	167	177	174	177	5	1086
なる（成）	W	2 2	72	95	103	103	118	139	125	113	127	6	1213
その（其）	W	3 3	141	135	125	126	144	91	92	93	110	7	1323
ない（無）	W	3 1	137	134	123	138	129	150	137	109	97	8	1420
もの	W	1 5	156	123	125	124	107	93	90	85	93	9	1513
この	W	3 1	72	74	64	69	99	73	83	76	77	10	1590
それ	W	1 1	33	61	96	67	80	78	79	82	71	11	1661
これ	W	1 3	114	71	61	60	76	56	44	42	57	12	1718
よる（依）	W	2 3	25	29	27	44	51	27	41	43	51	13	1769
くる（来）	W	2 2	27	46	40	39	41	50	49	50	48	14	1817
みる（見）	W	2 3	51	48	51	41	31	33	52	37	46	15	1863
ゆく（*1）	W	2 3	28	37	30	21	21	59	37	32	41	16	1904
思う	W	2 2	34	44	48	43	16	67	48	45	38		
人（ひと）	W	1 3	29	41	21	25	24	29	26	30	38	18	1980
日本	K	1 1	25	11	12	17	36	27	36	32	35	19	2015
ため（為）	W	1 2	29	35	34	28	46	32	23	36	31	20	2046
つく（*2）	W	2 1	10	5	12	15	24	28	16	22	30	21	2076
よい（*3）	W	3 3	21	29	36	27	15	35	31	27	28		
中（なか）	W	1 2	13	26	23	19	34	33	36	28	28	23	2132
対する	HA	2 2	17	18	18	19	41	29	27	19	27		
とする	W	2 3	16	18	17	18	15	24	18	23	27	25	2186
そう（副詞）	W	3 1	6	20	33	29	11	36	29	43	26	26	2212
私（*4）	W	1 2	3	37	51	36	40	46	28	50	25		
とき（時）	W	1 2	27	29	30	35	44	31	21	48	25		
できる	W	2 2	17	20	23	24	25	28	34	21	25		
わけ（訳）	W	1 2	2	10	9	8	10	15	26	10	25		
1（いち）	K	1 2	4	2	9	11	5	4	6	5	25	31	2337
出る（*5）	W	2 2	21	24	18	15	7	17	26	17	23		
考える	W	2 1	10	12	16	23	19	17	23	19	23	33	2383
また（接続）	W	4 2	58	41	36	35	33	26	15	16	22		
彼（かれ）	W	1 2	27	49	37	30	22	35	24	27	22		
そして	W	4 1		6	7	11	22	20	17	21	22	36	2449
問題	K	1 1	8	7	11	13	21	34	33	21	20	37	2469
もつ（持）	W	2 2	5	15	21	24	20	31	40	22	19	38	2488
どう（副詞）	W	3 1	5	10	19	16	12	28	24	21	18	39	2506
何（なに）	W	1 3	26	37	41	28	21	36	21	34	17		
おる（居）	W	2 2	13	12	10	10	4	11	10	5	17		
必要	K	3 1	5	3	3	9	14	11	12	5	17		
アメリカ	G	1 1	1	1	4		7	8	10	16	17	43	2574
しかし	W	4 1	6	22	17	36	27	33	29	24	16		
いま（今）	W	1 2	25	25	30	15	18	23	28	21	16		
そこ（其処）	W	1 1	7	14	15	15	21	11	19	15	16		
ござる	W	2 1	2	9	16	13	6	28	15	14	16		
こう（斯）	W	3 1	6	6	17	14	9	21	9	17	16		
合場	W	1 1	4	5	8	11	12	11	20	14	16		
おく（置）	W	2 2	7	15	6	14	13	9	7	9	16		
もう（既）	W	3 1	5	9	7	15	5	10	12	10	16		
強い	W	3 1	2	5	4	5	7	3	11	3	16	52	2718

語	種類記			(06	16	26	36	46	56	66	76	86)	(累積) 異なり	延べ
米国	K	1	1	3	12		1	1	3	5	5	15	53	2733
しまう	W	2	1	8	13	19	9	6	12	17	11	14		
さらに	W	3	1	14	10	9	12	7	7	13	7	14		
すべて	W	3	1	8	7	6	2	7	9	6	7	14		
3（さん）	K	1	2	1	1	7	2	6	2	4	4	14	57	2789
自分	K	1	1	5	16	21	11	15	17	13	16	13		
方（ほう）	K	1	2	5	23	15	11	4	15	11	8	13		
同じ	W	3	2	7	14	13	11	7	18	8	12	13		
大きい，な	W	3	1	4	4	12	9	3	15	17	17	13		
わかる	W	2	3	6	6	11	14	6	15	13	5	13		
人間	K	1	1	7	6	14	4	7	8	14	7	13		
後（あと）	W	1	2			3	5	5	4	9	11	13		
脳死	K	1	1									13	65	2893
一つ	W	1	2	9	22	18	14	10	15	26	15	12		
知る	W	2	2	15	16	14	13	11	13	13	18	12		
彼ら	W	1	3	12	9	12	11	19	8	8	10	12		
多い	W	3	1	17	8	7	9	9	5	12	2	12		
示す	W	2	2	7	3	7	6	10	5	8	7	12		
手	W	1	1	5	8	10	8	7	3	2	4	12	71	2965
おく（*6）	W	2	1	57	64	68	48	60	26	26	24	11		
今日（*7）	K	1	1	25	13	13	8	15	11	6	6	11		
行う	W	2	3	10	7	11	10	15	8	17	8	11		
しれる（知）	W	2	2	14	8	7	10	6	14	8	11	11		
前（まえ）	W	1	1	5	11	13	7	6	5	9	9	11		
国	W	1	1	3	7	3	3	6	4	8	7	11	77	3031
上（うえ）	W	1	2	10	19	12	22	13	13	9	12	10		
他（た）	K	1	1	15	15	12	17	17	14	8	5	10		
目（め）	W	1	2	13	13	10	10	6	13	7	14	10		
書く	W	2	1	5	6	17	9	3	12	14	14	10		
作る	W	2	2	4	8	16	5	4	16	8	9	10		
新しい	W	3	1	1	7		11	12	7	4	9	10		
日（ひ）	W	1	1	4	1	5	7	8	4	7	2	10		
高い	W	3	1	5	2	6	1	5	2	4	6	10		
2（に）	K	1	2	1	2	4	4	12	2	3	3	10		
ところが，で	W	4	1	5	2	3	6	5	4	2	3	10		
求める	W	2	1	7	3	4	2	8	2	2	2	10	88	3141
われわれ	W	1	3		3	12	11	16	18	15	14	9		
どこ	W	1	1	4	5	13	10	5	4	10	4	9		
時代	K	1	1	5	4	7	4	4	8	3	9	9		
過ぎる	W	2	2	9	3	11	3	6	2	7	3	9		
関する	HA	2	1	4	4	6	4	5	8	5	2	9		
認める	W	2	1	3	6	7	2	8	3	7	2	9		
仕事	W	1	1		1	13	3	3	7	3	2	9		
一方（*8）	K	1	2	3	3	2	1	9	1	3	7	9	96	3213
ところ	W	1	1	56	39	25	26	22	25	23	17	8		
ほか	W	1	3	9	10	14	9	10	8	13	3	8		
現在	K	1	1	3	7	8	12	7	7	9	12	8		
すでに	W	3	2	8	7	5	2	13	9	7	8	8		
男（おとこ）	W	1	1	13	9	7	9	2	8	4	4	8		
まだ	W	3	1	5	1	9	7	4	9	6	11	8		
かける（掛）	W	2	1	7	6	7	3	8	3	8	7	8		
たとえば	W	4	2	3	3	4	4	4	10	9	8	8		

語	種類	記		(出現頻度) 06	16	26	36	46	56	66	76	86	(累積) 異なり	延べ
受ける	W	2	2	4	7	5	3	9	4	7	4	8		
出す（だす）	W	2	1	7	6	4	4		6	8	7	8		
誰	W	1	2	2	5	8	4	4	6	7	5	8		
はず	W	1	1	3		7	3	4	10	4	5	8		
述べる	W	2	1	5	1	6	1	5	8	4	5	8		
使う	W	2	1		2	9	2	1	7	3	8	8		
つまり	W	4	1	3	2			6	6	11	4	8		
わたし（私）	W	1	2	2		7	1	2	1	4	9	8		
ソ連	HC	I	1				2	10	8	3	2	8		
より（副詞）	W	3	2			1	1	3	1	3	2	8		
企業	K	1	1					1		3	3	8	115	3365
[27語]												7	142	3554
[52語]												6	194	3866
[62語]												5	256	4176
[102語]												4	358	4584
[209語]												3	567	5211
[561語]												2	1128	6333
[3667語]												1	4795	10000

付表――――

語	種類	記		(出現頻度) 06	16	26	36	46	56	66	76	86	
聞く	W	2	4	8	17	18	17	12	6	12	7	7	
ぼく（僕）	K	1	3	9	4	13	20	1	12	15	13	7	
事実	K	1	1	3	7	10	14	13	12	11	9	7	
点	K	1	1	8	12	7	7	12	12	11	5	7	
うち（内）	W	1	5	9	12	9	8	13	7	8	7	7	
あるいは	W	4	4	11	9	12	6	8	5	10	8	7	
ここ（此処）	W	1	9	13	10	10	17	16	15	6	12	6	
あの	W	3	2	3	8	10	11	6	10	13	12	6	
ある（或）	W	3	3	7	8	13	6	6	10	13	10	6	
得る	W	2	3	21	17	9	13	16	5	7	5	5	
一人（*9）	W	3	5	7	16	8	13	15	7	7	5	5	
実（じつ）	K	1	2	21	15	7	8	9	2	2	10	5	
いたる（至）	W	2	5	26	8	9	12	9	5	1	3	5	
すなわち	W	4	8	23	14	14	9	5	3	2	2	5	
もし（仮定）	W	4	4	10	13	6	5	6	9	11	6	5	*
もしつ（以て）	W	4	6	32	38	10	8	12	4	2	2	4	
及び（接続）	W	4	3	13	14	13	12	12	5	10	8	4	
間（あいだ）	W	1	2	9	17	10	9	22	10	7	11	4	
ただ	W	3	9	18	17	13	8	12	9	11	7	3	
気（き）	K	1	1	9	8	13	20	2	15	6	10	3	
全く	W	3	3	7	10	7	5	12	12	9	6	2	*
顔	W	1	1	2	9	12	11	8	5	9	8	2	*
いか（如何）	W	3	3	19	17	14	9	18	5	7	4	1	
かく（斯）	W	3	4	20	19	9	6	11	2		2	1	*
なす（成）	W	2	6	22	12	8	12	7	1	2	3	1	*
女（おんな）	W	1	1	10	10	11	11	8	8	4	2	1	*
いわゆる	W	3	4	11	7	5	7	5	8	14	8		*

うちにあーて，1986年の上位の表にないものは，付表のうちの，最右欄に＊をしるした７語をのぞく20語である。

一方，報告の８年の上位101語にないが，1986年の上位115語にあらわれている，というものもある。つぎの表にかかげる41語である。数字は1986年の出現頻度。報告の８年と1986年との合計９年の上位95語にないが，1986年の上位115語にあらわれている，というものは，そのうちの，「必要」をのぞく40語である。

語	頻度	語	頻度	語	頻度	語	頻度
１（いち）	25	国	11	認める	9	はず	8
必要	17	新しい	10	仕事	9	述べる	8
アメリカ	17	日（ひ）	10	一方	9	使う	8
強い	16	高い	10	すでに	8	つまり	8
米国	15	２（２）	10	男（おとこ）	8	わたし（私）	8
すべて	14	ところが，で	10	まだ	8	ソ連	8
３（さん）	14	求める	10	かける（掛）	8	より（副詞）	8
後（あと）	13	どこ	9	たとえば	8	企業	8
脳死	13	時代	9	受ける	8		
示す	12	過ぎる	9	出す（だす）	8		
手	12	関する	9	誰	8		

今回の調査にはじめてあらわれた語の数は2438である。そのうちで，頻度３以上の32語をつぎに頻度順にかかげる。

語	種類	記	頻度	語	種類	記	頻度
脳死	K 1	1	13	猪口（いのぐち）	W 1	1	3
公定歩合	HA1	1	5	医療行為	K 1	1	3
中曽根	W 1	1	5	宦官	K 1	1	3
中曽根首相	HA1	1	5	K	G 1	1	3
判定基準	K 1	1	5	佐藤さん	HA1	1	3
遺伝子	K 1	1	4	ジャービック７型	HD1	1	3
円高	HA1	1	4	商業地	K 1	1	3
感性	K 1	1	4	定着	K 1	1	3
在勤	K 1	1	4	テクノクラート	G 1	1	3
死亡	K 1	1	4	ドブリーズ（人名）	G 1	1	3
執心	K 1	1	4	脳波	K 1	1	3
中（ちゅう）	K 1	1	4	歯止め	W 1	1	3
脳幹	K 1	1	4	埴谷（人名）	W 1	1	3
フィレンツェ	G 1	1	4	法王	K 1	1	3
不可欠	K 3	1	4	与党	K 1	1	3
マキアヴェッリ	G 1	1	4	レーガン大統領	HC1	1	3

第１位は，すでにあきらかであるように，「脳死」である。その「脳死」の頻度10，および「判定基準，脳幹，脳波」の頻度すべてが，うえにのべた立花隆の記事「脳死」のものである。このような，調査結果と標本ないし母集団との関係は，全体にわたって検討されなければならないのかもしれないが，いま，めだつものひとつのみにふれて，これでとどめておきたい。

１．３．　1976年までとの連続でみた語彙（pp. 50－54）

1986年の用語と他の年の用語との類似の程度を，いくつかの計算のしかたでしめす。類似の様相のしめしかたには種種のものがあるが，ここにしめしたものは，いずれも簡単な計算によるものである。すなわち，1986年と他の年とに共通に出現する語について，

Ａ　その異なりの数

Ｂ　おおきくないほうの頻度の累計

Ｃ　1986年のほうの頻度の累計

Ｄ　他の年のほうの頻度の累計

である。Ｂ以下については，一般的には，頻度でなく出現率で規定すべきものであるが，ここでは，各年の延べ語数がひとしいので，頻度で代用することができる。出現率によるＢは宮島達夫のいわゆる語彙の類似度であって，報告ではそれがしめされている。出現率によるＣ・Ｄは水谷静夫の指標であって，Ｃは，1986年でないある年の用語が，1986年の用語の延べのどこまでをおおうか，Ｄは，1986年の用語が，他の年の用語の延べのどこまでをおおうかを，それぞれしめすことになる。

	1906年	1916	1926	1936	1946	1956	1966	1976
A	979	1060	1056	1115	1138	1188	1246	1246
B	3712	4230	4407	4450	4483	4800	4909	4756
C	5212	5402	5389	5570	5569	5710	5832	5818
D	5383	5707	5739	5635	5902	6106	6047	5649

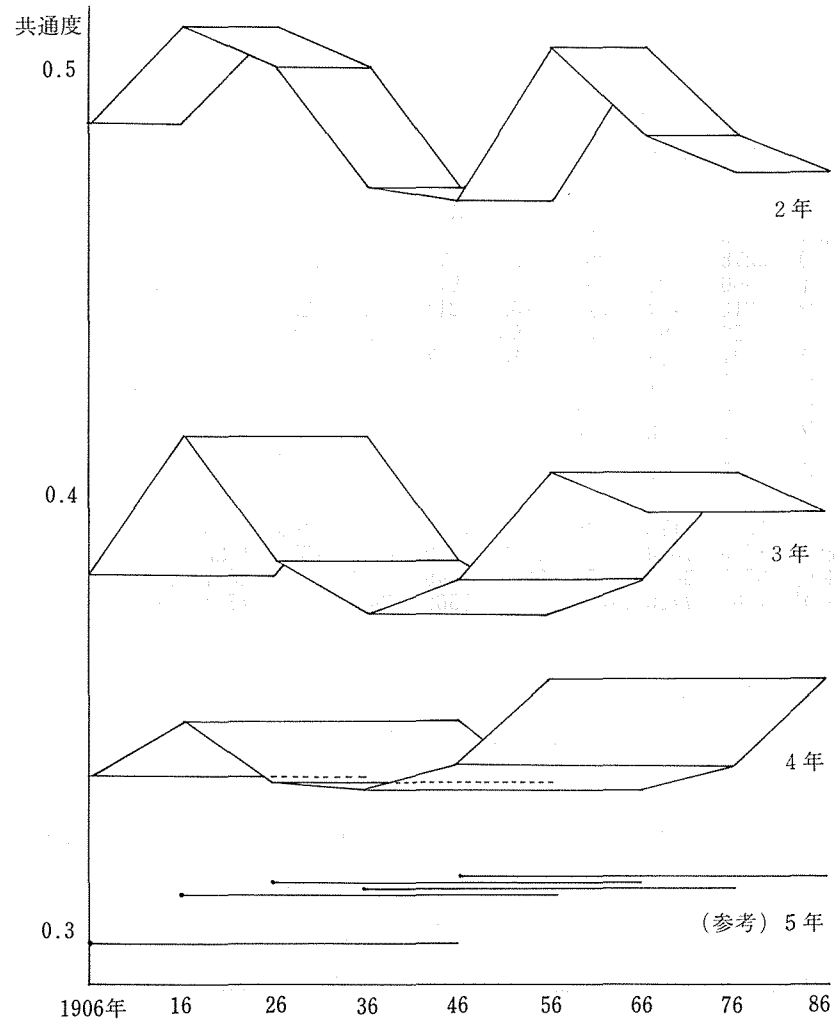
Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄの数値の大小は，大体において平行しているが，こまかい

ところではでいりがあり，水谷1982で検討されているように，相応の利用のしかたが要求されるものとおもわれる。1986年がどの年とにているかというようなことも，あまり容易にいいうるものでもないようである。Aによるならば，1986年は，1966年・1976年と，異なりで同じ数の語をよく出現させ，しかし，B・Dによるならば，1976年よりは1966年によく出現した語にかたむいている。しかも，Dによるならば，1956年によく出現した語を，1986年はさらにおおく出現させているかもしれない。

ところで，いま，報告にしたがってBを拡張し，3年以上にわたる用語の共通性を算出する。すなわち，対象とする年すべてに共通に出現する語について，もっともちいさい頻度を累計する。Aをもしめす。

	3年（1966－1986年）	4年（1956－1986年）
A	807	619
B	3966	3578

3年の共通度は1916－36年の4136と1956－76年の4050につぎ，4年の共通度は，報告でもっともおおきかった1916－46年の3481をうわまわっている。4年の共通度からみるならば，用語は，第二次世界大戦をはさんで，いわば戦前戦中期と戦後期とふたつの安定した時期があり，しかも後者のほうが一段と安定している，ということになるであろう。この結論は，今回の調査によってしめされる，いちじるしい結果である。ただし，3年・2年の共通度は1956年から1986年にかけて下降している状態にあるので，安定性がたかいながらも，次第に拡散してきているということにもなるかもしれない。それは，1916年から1946年にかけての状態ににている。連続する2年の用語の共通度つまり類似度，3年の共通度，4年の共通度を，図にしてしめす。図においては，共通性の度あいをしめす縦軸の数値を，上記の数値を1万で除したもの，つまり出現率にもとづくものにしてある。



1．4．　表記・文字（pp. 182－186）

いくつの表記の種類をもつ語がいくつあるかを，報告の8年をも引用しながら，しめす。ここで，種類0は語としての出現頻度が1のもの，種類1以上は出現頻度2以上である。なお，各年について数値4種をそえる。語計は種類1以上すなわち出現頻度2以上の語の数，記計は表記の種類の数と語数

との積の合計，平均はその記計を語計で除したもの，１率は表記の種類が１の語の数を語計で除したものである。平均の数値の整数部分１および１率の数値の整数部分０は，しるすことを省略した。

	(				語 数				)
種類	06	16	26	36	46	56	66	76	86
0	3278	3241	3396	3626	3276	3174	3543	3803	3667
1	900	909	835	854	915	918	878	880	915
2	213	177	226	202	211	207	206	222	185
3	59	55	58	50	28	36	19	26	27
4	21	18	9	14	7	5	3	5	-
5	5	7	6	2	2	1	-	-	1
6	4	4	1	2	-	-	-	-	-
7	1	2	4	-	-	-	-	-	-
8	2	-	-	-	-	-	-	-	-
9	-	-	1	-	-	-	-	-	-
語計	1205	1172	1140	1124	1163	1167	1106	1133	1128
記計	1659	1573	1570	1486	1459	1465	1359	1422	1371
平均	.3768	.3422	.3772	.3221	.2545	.2554	.2288	.2551	.2154
１率	.7469	.7756	.7325	.7598	.7868	.7866	.7939	.7767	.8112

平均および１率としてしめした数値によって，一語あたりの表記の種類の数が，１に収束しつつほぼ減少傾向にあることが，みてとれ，1986年がその傾向のうえにあることもあきらかである。1986年において，表記の種類の数の最大５をしめしたものは，語「もの」であり，表記「もの（出現頻度81），モノ(１)，もん(１)，者(９)，物(１)」という種類であった。

ここで，個個の語にたちいらず，多少の特徴のみられる一群として，もっとも基本的な数量詞の表記を，つぎに一覧する。数量詞は，助数詞などをともなっているばあいもふくめ，出現頻度がちいさくなく，しかも，日本語の機械処理のなかにあっては読み書きともに厄介である。そうして，表記の問題としてそこにみられるのは，一般に注目される仮名と漢字との相克でなく，アラビア数字と漢字とのそれである。漢語系統の数量詞では，漢字表記からアラビア数字表記への移行がいちじるしい。ただし，1986年のばあい，抽出標本に横書きの表３葉があり，数字はすべてアラビア数字であって，出現頻

度のみぎの括弧内に，それぞれの表における出現頻度の内数をしめしてある。それを考慮するならば，アラビア数字への移行という印象は，多少よわまるかもしれない。しかし，表とはいえ，横書きがえらばれ，アラビア数字がえらばれていることは，相応に評価すべきである。和語系統の数量詞は，仮名表記「ひとつ」が漢字仮名まじり表記「一つ」に対して相対的にのびているらしいということのほか，漢字表記が安定している。ここにあがっていない10よりちいさい数量詞は，まだ出現をみていない。「10，三つ，四つ」は，「じゅう，みっつ，よっつ」である。

語・表記	種類記			(出現頻度 06	16	26	36	46	56	66	76	86)	
1（いち）	K	1	2					1	1	2	4	16(1, 1,10)	
一				4	2	9	11	4	3	4	1	9	
2（に）	K	1	2					1		3	2	9(1, 1, 4)	
二				1	2	4	4	11	2		1	1	
3（さん）	K	1	2					1	1	3	3	13(2, 1, 8)	
三				1	1	7	2	5	1	1	1	1	
4（よん）	W	1	2			1		1	1	1	2	5(-, 1, 3)	
四				1	4	5	1	2		2		1	
5（ご）	K	1	2						1		3	5(3, 1, -)	
五				1		2	1					1	
8（はち）	K	1	1			3			1	1		2(1, -, -)	
9（きゅう）	K	1	1						1			1(1, -, -)	
10	K	1	1			2				2		1(1, -, -)	
一つ	W	1	2	6	11	17	13	9	14	21	10	7	
ひとつ							1	1	1	5	5	5	
二つ	W	1	1	5	1	2		8	3	4	3	3	
三つ	W	1	1			2	2		2	3	1	2	
四つ	W	1	1			1				1	1	2	

ついでをもって，数量詞を表記する漢字および数字を一覧する。人名などのものも区別せずにまとめてあるが，このようにしてみると，漢字の勢力はアラビア数字におとっていないらしいともしられる。なお，うえの基本的な数量詞の表記の一覧では，アラビア数字がまるでかこんであっても特に区別していないが，ここでは区別する。漢字で，「九」のすぐあとにあるものは，零をあらわす記号である。数値は1986年の出現頻度。

一	180	十	81	1	56	①	12	Ⅰ	2
二	71	百	13	2	46	②	7	Ⅱ	2
三	66	千	10	3	26	③	6		
四	40	万	14	4	28	④	3		
五	40	億	5	5	35	⑤	1		
六	30	兆	1	6	22				
七	30			7	13				
八	20			8	27				
九	25			9	17				
〇	18			0	31				

文字の出現頻度はつぎのようである。カタカナとして分類したものには，「ヵ（出現頻度７），ヶ（２），ー（長音符号，253）」をふくみ，また，擬態語「ドン〳〵」の「〳〵（反復符号，１）」をふくんで，この反復符号１個を２字とかぞえている。この長音符号には，ひらがなとともに出現している「じゃーね」のもの１個をふくむ。漢字は，「㊮（まるゆう，１），々（反復符号，19），〇（零，18）」をふくむ。数字は，アラビア数字およびローマ数字であって，たとえば「1986年」という表記では数字４字および漢字１字とかぞえ，まるつき数字「①，…，⑤（出現頻度合計29）」はまるのなかごとにひとかたまりとして１字，ローマ数字「Ⅰ（出現頻度２），Ⅱ（２）」はひとかたまりごとに１字とかぞえている。また，振り仮名・振り漢字のあったものは，それをもかぞえ，誤記については，あやまりとただしたものとを二重にかぞえてある。振り仮名・振り漢字および誤記については，あとの２．２．を参照。句読点・括弧などの記号はかぞえていない。括弧内は百分率。

	ひらがな	カタカナ	漢字	数字	ラテン文字	合計
延べ	19401(52.9)	2636(7.2)	14110(38.5)	334(0.9)	196(0.5)	36677
異なり	71	81	1560	17	40	1769

漢字含有率が，戦後，微小ずつながらも増加傾向にあることは，報告でも問題とされているが，1986年の数値もその傾向のうえに位置している。

出現頻度のおおきかった文字を一覧する。うえの数量詞を表記する文字の一覧は，一部これと重複する。

（ひらがな）				（カタカナ）		（漢　字）		（数字）	
1695	1030	977							
910	904	815							
801	720	716							
714	706	671							
634	543	485							
467	458	447							
429	390	368							
357	290	286							
258	217	217			253				
212	189	181		ン	180	一	180		
170	168	162							
158	149	144		ス	113	日	156		
116	114			リ	106	年	138		
100	100			ル	100	的	115		
92	88	88	ば	ト	92	出	87		
				ア	87	事	76		
				イ	75	二	71		
69				ク	73	三	66		
62				ッ	66	時	63		
						政	61		
				レ	58	間	58		
54				カ	54	経	54		
51				ラ	51	理	52		
						実	49		
				シ	47	前	48		
				テ	46	関	46		
						場	45		
				メ	44	代	44		
43				タ	43	長	43		
				デ	41	論	43		
				ジ	41	今	41		
41				ィ	39	四	40		
				キ	38	治	39		
				マ	38	同	38		
				エ	38	外	38		
				ド	37	来	37		
					37	現	37		
						新	36		
						要	36		
						書	36		
				グ	35	気	36		
34				ロ	35	子	35	5	35
				コ	34	田	34		
32						主	33		
						不	32		
						官	32		
				ム	31	世	31		
						六	31	0	31
				ニ	30	話	31		
						通	30		
						立	30		
						件	30		
						知	30		
						相	29		
				チ	28		29		
							28		
							28		
							28	4	28
							28		
27							27	8	27
							27		

頻度27までで，延べと異なりとの累積は，つぎのようである。括弧内は，上記の字種ごとの出現頻度に対する百分率。ラテン文字は，この範囲ではみられない。

	ひらがな	カタカナ	漢字	数字	合計
延べ	19149(98.7)	1949(73.9)	6298(44.6)	223(66.8)	27619(75.3)
異なり	52(73.2)	30(37.0)	128(8.2)	6(35.3)	216(12.2)

2．現実に使用されたときの語のかたちの長さ

すでにふれたように，1986年の調査では，原文に多少加工したものがコンピュータファイルとして作成してある。報告にはのべられなかったことで，そのコンピュータファイルを利用する一例として，語が現実に使用されているときの，その長さをはかるということを，こころみる。同様の調査が国立国語研究所報告8『談話語の実態』でもおこなわれていて，それと対比しながらのべるのがすじであるが，ここでは，このようなことが容易にできるという見本として簡単に数値を紹介するにとどめ，対比しての検討は別におこなうこととしたい。

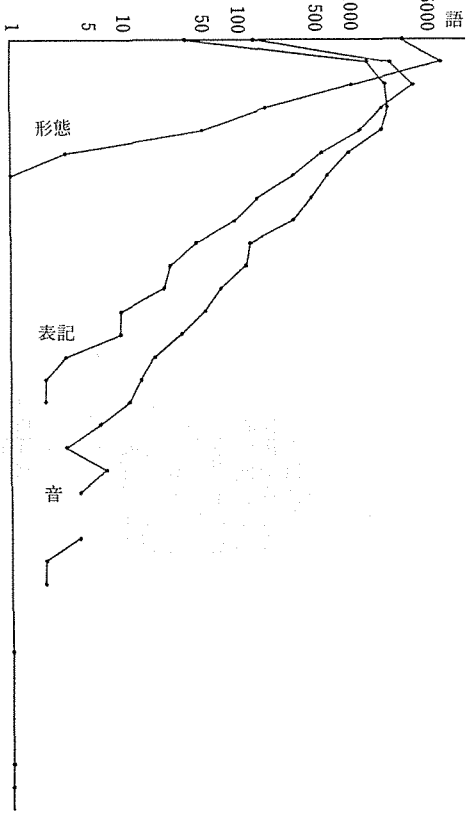
語の長さは，語の構造の単純・複雑の推定の基本となりうるものであり，あとにもふれるが，語彙の計量調査の計画にもかかわるところがある。ここでは，語の長さとして3種類のものをかんがえる。

- 形態にかんがみて，ひとつの語がひとつの自立部分といくつの付属部分とから構成されているか。その部分の合計の数。
- 表記にかんがみて，ひとつの語がいくつの文字で表記されているか。その文字の数。
- 音にかんがみて，ひとつの語がいくつの音（いわゆる拍）から構成されているか。その音の数。

はじめに，この結論としての分布をしめす。したのほうにしめした合計は，

長さと語数との積の合計である。また，計算をほとんどともなわない統計量であるが，最頻値(mode)・中央値(median)・四分位点(quartile point)および分散(variance)・標準偏差（standard deviation）をしめす。分布をみただけでも，あるいはこのような簡略な数値のみでも，特徴のおおかたをしることができる。以下にのべるところは，この表についての注釈となる。

長さ	（語数） 形態	表記	音
1	2774	138	35
2	6016	2228	1361
3	980	3475	1966
4	178	1808	2105
5	48	1174	1844
6	3	526	893
7	1	302	599
8		142	429
9		93	304
10		42	125
11		25	115
12		22	68
13		9	50
14		9	32
15		3	18
16		2	14
17		2	11
18			6
19			3
20			7
21			4
23			4
24			2
25			2
28			1
33			1
34			1
合計	18723	36677	47798
最頻	2	3	4
中央	2	3	4
四分	1,2	3,4	3,6
分散	0.4808	2.9884	6.4954
偏差	0.6934	1.7287	2.5486



ところで，たとえば，和語と漢語とで，あるいは体の類と用の類とで，語の長さがことなるのではないか，といったことは，ただちにおもいうかぶ疑問である。実際，中野1973は，音による長さについて，分類による差があると報告している。中野の調査は，出現したかたちについておこなったものであるが，採用している単位の関係で，非四段活用動詞のおおくをのぞき，見出し語についてのものと理解することもできる。しかし，ここでは，どの長さについても，そうした問題にたちいることはしない。ただ，問題に充分に展開の余地があるということをのみ，かきとめておく。

形態・表記・音それぞれの観点から，長い語をかかげておく。長さのはかりかたについては，あとにのべる。

(長さ) 形	記	音	語	
7			覚えてないのですが	(10月 p.128)
6			話し合ってるんだもん	(8月 p.392)
6			効かないんだそうです	(2月 p.306)
6			誅殺されたのだが	(6月 p.370)
	17	34	昭和61年６月16日（月）～９月25日（木）	(2月 p. 8)
	17	33	中央公論社中央公論編集部新人賞係宛	(10月 p.398)
	16	28	三菱化成生命科学研究所主任研究員	(5月 p.301)
		25	全日空商事（株）旅行サービス部へ	(1月 p.178)
		25	一九八五年十月三十一日	(1月 p. 64)
	16	24	２５６キロビットＤＲＡＭ半導体の	(12月 p.419)
		24	平井経済安定本部総裁官房長	(11月 p.390)

「㈪, ㈭」は音として「げつ，もく」を，「DRAM」は「でぃいらむ」を，それぞれとった。「㈱」は，「かぶしきがいしゃ」をとったが，異論もあるであろう。語としての分割のしかたについては，あとの3.をも参照されたい。

2.1. 形態レベルでの語の長さ

語は，現実にもちいられるときには，自立部分のみであることも，付属部分をともなっていることも，ある。語の長さの表で，長さ１とは，自立部分のみから構成されているということをしめす。

さて，ある部分が自立的であるか付属的であるかは，つねにあきらかであ

るわけではない。付属部分を中心として，つぎのように規定する。規定の例において，＝数は，そのかたちの付属部分の数をあらわす。

・付属部分は国文法のいわゆる助動詞・助詞を基本とし，ここでの作業はその数をかぞえることである。

それを語形変化であるとするたちばからいうならば，ここでの作業は語形変化の接辞的に拡張されている部分の数をかぞえることである。

・非四段活用動詞の命令形の語尾「ろ」は，付属部分（助詞相当）であるとみなす。

例　しろ＝1

同様の語尾「よ」も，おなじくあつかうべきであったろうが，今回は終助詞「よ」と合算した。

・形容動詞および同型活用助動詞の語尾「だ，に，な」などは，付属部分（助動詞相当）であるとみなす。この付属部分は，助動詞「だ」と同一視する。語幹での言い切りのばあいには，付属部分がないとみなす。

例　静かな＝1　静かだった＝2　静か＝0

この結果，形容動詞は，名詞とおなじくあつかわれることになる。

・漢語などに「する」が接続して動詞となっているものは，その「する」は付属的であるとみなさない。しかし，「される，できる」などに交替しているときは，付属部分（補助動詞的）であるとみなす。

例　研究する＝0　研究できる＝1　研究された＝2

・可能動詞，補助的動詞「いる」などの融合したかたちは，付属部分（補助動詞的）があるとみなす。

例　話せる＝1　話してる＝2　話してた＝3

・待遇の接頭辞「お，み，ご（御）」は，付属部分(接辞）であるとみなす。

例　御研究＝1　御研究さえも＝3

ただし，語彙表の見出しにそれがついているばあいは，付属部分であるとみなさない。「お妃選び」の「お」など。

・副詞・連体詞・接続詞とみなしてしまったものは，語源上は付属部分であるものがあっても，それを付属部分であるとみなさない。

例　あえて（副詞）＝0　更に（副詞）＝0　更には＝1
大きな（連体詞）＝0　大した（連体詞）＝0
けれども（接続詞）＝0　しかしね（接続詞）＝1

一般に，「…に，…と，…て」のかたちをよくもちいるとおもわれる副詞などは，その「に，と，て」をふくめて，副詞などとみなした。例外は，「従って，以て，頻りに，直ちに，常に，主な，主に，本の」で，それらは，『現代雑誌九十種の用語用字』を勘案して，最終部分を付属部分であるとしてあつかっている。

以上の規定は，付属部分がいくつあるかという，めにみえるかたちについてのものであるよりは，特に動詞をめぐってあきらかであるように，基本的な無標のかたちに対して，かたちとしての有標性にかかわるものであるといってよい。したがって，しめした数字も，語の長さというよりは，語の有標性の数をとらえているものであるといってよいであろう。

いうまでもないことながら，「目の前に」「佇立させつづけて」といった語が出現しているが，その「の」「させ」などは，規定中に例としてあげた「お妃選び」の「お」と同様に，語彙表の見出しにあらわれる，自立部分に属するものであるので，付属部分としてはかぞえない。

付属部分の一覧をかかげておく。おおむね，国立国語研究所報告3『現代語の助詞・助動詞』の項目にしたがう。ただし，助動詞「う，よう」「せる，させる」「れる，られる」は，それぞれのくみごとに合算した。助詞「が」を格助詞と接続助詞とにわけていないとか，助動詞「そう」を様態と伝聞とにわけていないとか，形態論上，いささかの欠陥がある。数値は1986年における出現頻度。

なお，この形態のデータは，単位分割をした原文のファイル，あるいはそのまえの作業としての仮名のみによる原文のよみのファイルとともに，いわば原文にそったかたちでファイル化してある。しかし，このファイルは，今回の調査のために特に必要であったわけではない。また，仮名のみのファイルのように適当にできあがってしまうものでもない。単位分割の適否を検査するための一手段として，付属部分の境界をかきこむかたちで，作成したものである。単位分割をした末尾に付属部分があるときには，その単位分割は，一応，妥当である可能性がある。もとより，自立部分としたうちに付属部分

助動詞	
うき	72
（よ）	1
［古語］	2
きるるうただいるすいるぬぬしすやういるる	2
ごとざせそ	15
（さ）	5
	496
	745
	22
たたでなな	3
	71
	137
	7
	51
［古語，完了］	1
べま	17
	68
［方言，だ］	1
［様］	69
ら	1
	4
（ら）	106

補助動詞など	
［融合形］	8
［融合形］	1
	1
	9
	58
［お…する］	3
	2
	1
	1
	12
	1
	1

活用形式	
［可能動詞形式］	25

接頭辞	
［御］	14
［御］	13
［御］	1

助詞	
かがららいもそさえしかもぞけりつててててもももとかかでもならどりてにねのでにみはばりへどでもののやよりろわを	118
	566
	1
しからどこ	151
さ	8
し	7
	5
	1
	6
	17
	8
	1
	1
だたつっ	25
	20
	5
	6
	722
［方言，って］	1
	220
	34
	18
	544
	15
	1
ここ	1
どと	4
	6
	8
	29
	1
な	2
	804
	27
	1389
	11
	2
	8
	762
	61
ば	3
	35
ほま	10
もの	30
も	213
	1
	3
	49
	22
よ	18
［命令形語尾］	4
	1
	671

がまぎれているときには，また，付属部分をともなわないらしい20－30パーセントの単位については，このファイルは有効でない。しかし，単位分割の一応にせよ確認のために，このファイルを作成してみたのである。

2．2．表記レベルでの語の長さ

報告（pp. 61－64）では，見出し語についてであるが，漢語の構成要素数と表記漢字数とを，対応関係にあるものとしてとらえ，表記漢字数によって漢語の語構成が検討されている。

さて，現代日本語を漢字仮名交じりで表記したとき，一語あたりの文字数が平均して大体4であることは，経験的にしられている。四百字詰原稿用紙に換算して，一枚あたり100語である。語彙計量調査をおこなうときに，目標とする延べ語数を設定したり，種種の作業の量を予測したりするのに，その数字は実際に重宝する。そう経験的にしられているということは，しかし，しかるべき調査があってそれにもとづいているということではなく，さらに，句読点・括弧等の記号をふくめての数字であるか，漢字をどれくらいふくんでいるか，ということにもこだわっていない。

ここで文字をかぞえたが，なにを文字としたかということは，うえの1．4．におなじく，振り仮名・振り漢字をかぞえ，誤記を正誤二重にかぞえ，句読点・括弧等の記号をのぞき，例外的にかぞえた記号は，長音符号，反復符号，漢数字と併用する「〇」などである。結論としてすでにしめした長さの分布は，経験的にしられている数値が微妙にあたっていることを，しめしているであろう。

ところで，振り仮名・振り漢字をも合算したのは，よみかきという行為において，本文とともにかえりみられているであろうと，かんがえたからである。ばあいによっては，よむがわで，本文をみずに，振り仮名のみをみているということもあるであろう。振り仮名・振り漢字は，つぎの17箇所にあった。[　] 内が振り仮名ないし振り漢字である。そのなかでさらに（　）に

つつんであるのは，本文のわきにある通常のものでなく，本文にまぎれるようなかたちで（　）につつまれていて，しかも振り仮名・振り漢字相当とみなした，ということをしめす。振り仮名・振り漢字は，1986年の『中央公論』の全体では3000箇所をこえるとみられるので，標本抽出比からみるならば，抽出された量がややすくない。

淡［あはの］　（歴史仮名遣い，地名「～郡に」，　2月 p.371）
位［くらい］は　（地位，　1月 p.328）
期［ご］に　（「この～およんで」10月 p.353）
法王選出会議［コンクラーベ］では　（　7月 p.332）
伊達宗克［だてむねかつ］　（人名，12月 p.348）
田節［たふし］の　（地名，　2月 p.371）
趙丹［チャオ・タン］　（中国人名，　1月 p.298）
佇立［ちょりつ］させつづけて　（　2月 p.353）
唐通［とうつう］で　（中国人名，10月 p.368）
白楊［パイ・ヤン］　（中国人名，　1月 p.298）
侍［はべ］らせて　（　5月 p.376）
蕃滋［ふえ］る　（　3月 p.371）
明星学園［みょうじょうがくえん］　（学校名，　8月 p.　2）
山川静夫［やまかわしずお］　（人名，　9月 p.　48）
山本孝之［やまもとたかゆき］　（人名，　2月 p.263）
人［（ヒト）］に　（12月 p.153）
アユ［（鮎）］　（11月 p.165）

誤記も，あやまった原文とともに，ただしたものも想定されてよまれるであろうと，かんがえ，表記レベルについては二重にかぞえている。1986年の標本のうちで誤記と解釈したものは，つぎの３箇所であり，［　］内が原文である。最下の１箇所は，脱字があったのであり，「なかな」を二重にかぞえたが，よい処理ではないかもしれない。

今日［回］のソ連では忘れられてしまった作曲家たちの　（　6月 p.　55）
CLINICAL NEUROSCIENCE vol.1 no.1 <19[0]83-10>　（　2月 p.338）
なかなか［なかな］容易じゃないです。　（　9月 p.138）

形態レベル・音レベルでは，振り仮名・振り漢字あるいは誤記を二重にかぞえることは，していない。

出現頻度のおおきかった文字については，うえの１．４．に一覧した。

2.3. 音レベルでの語の長さ

書かれた文章をすべて仮名がきにし，その仮名についてなんらか調査をする，ということの意義は，現代日本語にとって，特に書きことばにとっては，かならずしも明瞭でない。それにもかかわらず，ここでその作業をおこなってみようとするのは，日本語の音をめぐる単純な計量調査が存外にとぼしく，仮名を音にみたてることによってあるいは代用になるのではないかとおもうからである。現代日本語に音がどのように出現しているのか，その調査は，もとより，話されたものについてなさるべきであり，ここでの調査がどの程度までその代用でありえているかは，その調査をまってあきらかにされることになるであろう。

うえに音の長さとしてしめしたものは，現実に出現しているかたちでの語を現代仮名遣いで仮名のみで表記した，その仮名の数である。ただし，仮名を音にみたてることを前提とした，当然の処置として，拗音の類の通常はちいさくかかれる「ゃ，ゅ，ょ」などをかぞえていない。

角川小辞典9『図説日本語』に，語の長さにかかわるものとして，林大1957・中野1973・横山1979の見出し語相当の拍数調査の結果が紹介されている。中野は新聞の語彙の延べと異なり，林・横山は辞典の見出しについての調査である。それらと対照させてみる。ただし，いずれも，百分率に換算して引用する。最頻値・中央値・四分位点もしめす。中野の延べは，書きことばであることもあり，対象としては1986年の結果としてしめしたものにもっともちかいはずであるが，さきにふれたように単位にちがいがあり，すなわち付属部分をきりおとしてあって，双方にてもにつかぬ数値をみちびきだしている。むしろ，奇妙に感じられるのは，1986年の結果が，最頻値・中央値に端的にあらわれているように，中野・林・横山3者の異なりの結果にちかくみえることである。ただ，ちらばりにずれがあるので，見出し語の水準で長さのちいさい語が，長さのちいさい付属部分をともなって出現している，とい

長さ	1986年	中野延べ	中野異なり	林	横山
1	0.4	47.1	1.7	0.3	0.5
2	13.6	20.9	12.4	4.8	7.0
3	19.7	14.5	30.8	22.7	29.7
4	21.1	15.5	40.7	38.8	49.0
5	18.4	1.3	8.8	17.7	9.0
6	8.9	0.5	3.8	11.0	3.4
7以上	18.0	0.2	1.7	4.8	1.4
最頻	4	1	4	4	4
中央	4	2	4	4	4
四分	3,6	1,3	3,4	3,5	3,4

うことであろうかとおもわれる。見出し語の水準の長さと出現しているかたちでの長さとの関係など，今後の課題としたい。

なお，仮名の出現頻度を，拗音類は拗音類として，しめす。この頻度一覧は，音の代用にはならないが，制約をこころえているならば，適当に音の実態を示唆しているといってよいとおもわれる。制約というのは，第1に，長音は，ア行音におきかえてあり，特に，仮名「う」は，オ列長音の表記を考慮しなければならない。この点，和語・漢語については現代仮名遣いのうちにあるが，外来語に対して現代仮名遣いを拡張したことになる。第2に，ここの仮名「は，へ」は，助詞「は，へ」などの表記を考慮しなければならない。助詞「は，へ」の出現頻度は，うえの2．1．を参照。仮名「を」は，そのまま音「オ」とみなしてよいから，さして支障とならないであろう。第3に，語「マキアヴェッリ（出現頻度4，すべてこのような片仮名がき）」のうちの表記「ヴェ」は，ここの仮名は「ベ」としてある。

一覧のたて・よこで合計をしめしてある。合計をその段階でとめてあることには，怠慢のそしりをうけるかもしれないが，これにちかい音韻論のたちばもありうるであろう。

															計
あ	772	い	3506	う	3104	え	486	お	561						8429
か	1764	き	860	く	1300	け	517	こ	1073						5514
さ	611	し	1483	す	610	せ	628	そ	537						3869
た	1325	ち	514	つ	766	て	1225	と	1474						5304
な	982	に	1352	ぬ	27	ね	261	の	1901						4523
は	1146	ひ	249	ふ	179	へ	90	ほ	240						1904
ま	521	み	322	む	123	め	327	も	697						1990
や	206			ゆ	117			よ	475						798
ら	599	り	537	る	1067	れ	686	ろ	341						3230
わ	395														395
								を	671						671
が	989	ぎ	140	ぐ	104	げ	185	ご	260						1678
ざ	123	じ	507	ず	144	ぜ	126	ど	72						972
だ	571			づ	29	で	815	ぼ	344						1759
ば	199	び	83	ぶ	239	べ	144	ぽ	93						1758
ぱ	60	ぴ	21	ぷ	31	ぺ	3		117						232
きゃ	11			きゅ	100			きょ	195						306
しゃ	135			しゅ	220	しぇ	4	しょ	286						645
ちゃ	20	てぃ	10	ちゅ	77	ちぇ	1	ちょ	119						227
にゃ	2			にゅ	25			にょ	1						28
ひゃ	31			ひゅ	2			ひょ	23						56
みゃ	2			みゅ	1			みょ	3						6
りゃ	9			りゅ	22			りょ	98						129
ぎゃ	5			ぎゅ	1			ぎょ	70						76
じゃ	28			じゅ	311	じぇ	5	じょ	170						514
		でぃ	19	でゅ	2										21
びゃ	2			びゅ	1			びょ	12						15
ぴゃ	3			ぴゅ	2			ぴょ	6						11
		うぃ	6			うぇ	3	うぉ	1						10
		つぃ	1	と	1	つぇ	6	つぉ	3						11
ふぁ	4	ふぃ	9												13
		ぐぃ	1												1
										っ	876				876
										ん	2827				2827
計	10515		9620		8605		5512		9843		3703				47798

3．調査単位をめぐる注釈

今回の調査においても，調査単位にかかわる問題がすくなからず生じた。もとより，採用する単位は，文節相当の長い単位とあらかじめさだまっている。したがって，生じた問題もそのわくのなかでの個別的なものであり，解決がことなっていたとしても，さしたる影響を調査結果におよぼすとはかんがえられない。しかしながら，今回の調査についやした時間のおおくが，原文のコンピュータ入力と，この単位の問題にかかわることであって，その記録ものこしておくべきであろうとおもわれる。今後の語彙の計量調査においては，おそらく，五十音順排列・語彙表作成といったことの作業量は，機械化の効果で問題とならなくなるであろう。しかし，採用した単位の基準にてらして個別的な問題を解決してゆくということは，当分，手作業の範囲をでることがむずかしいようである。

3．1．単位の長さ

単位の長さが調査結果におおきく影響し，さまざまな問題をかかえていることは，報告（pp. 11－23）にのべられている。ここでは，報告にのべられていないことのうち，付属語にかかわることと文の認定にかかわることとを中心として，実際の調査の単位認定作業で問題になったことがらを，記録しておく。長さの問題は，幅の問題にもかかわってゆく。

念のため，長い単位の規定の本体を報告（pp. 18－23）から引用する。

原則　長い単位としては原則として文節を採用する。
文節の認定上問題になる形式については細則に従う。

細則1　付属語（助詞・助動詞）の範囲は国立国語研究所報告3『現代語の助詞・助動詞』の目次に挙がっているものとする。

細則2　自立しうる体言的な形式（単独で，あるいは付属語をつけて文節として用いられうる体言的なもの）が直接的な関係をもちながらふたつ以上並んでいるばあいには，原則として続ける。

細則3　2文節以上からなる形式全体に関係する接辞あるいは体言的な形式は，その前あるいは後を切る。

細則4　擬声語・擬態語・かけ声はいくつかの部分に分けられるものでもひと続きとする。

細則5　次の形式は，指示のあるように扱う。
（一覧省略。自立しうる形式ふたつ以上を含む形式について，報告および今回の調査では，『新潮国語辞典』に一語として立項されているものを一語とした。）

細則6　括弧のなかに補足・説明のあるばあい，括弧の外と中とを別個に扱う。

ここに中心としてとりあげるといったものは，第1に，細則1にかかわり，またそれとの関係で細則5にかかわる。第2に，細則2の例外規定のひとつ

あとの形式が動作性名詞で体言どめの文（終止句・中止句・「～と」の引用句）の述語であり，しかも，まえの形式がその述語に直接関係する形式であるなら切る。

にかかわる。なお，以下の議論のためにつけくわえるならば，報告の8年および1986年の調査で，単位の幅つまり同語異語判別の問題は，国立国語研究所報告21・25『現代雑誌九十種の用語用字(1)(3)』にしたがうことをもって解決としている。

まず，細則1の付属語にかかわる問題。この問題は，今回の調査で問題になったというよりも，報告にしめした調査結果について，検討の必要が生じたというものである。それは，「ほど」を末尾にふくむ，つぎの一群であって，報告の8年および1986年の出現頻度などもしめす。

語	種類記	(出現頻度) 06	16	26	36	46	56	66	76	86
ほど	W 1 1	－	－	－	－	－	1	－	－	1
身の程	W 1 1	－	－	－	－	1	－	－	－	－
中程	W 1 1	－	－	1	－	－	－	－	－	－
さきほど	W 3 3	－	1	1	－	－	－	1	－	－
さほど	W 3 1	1	－	－	－	1	－	－	1	－
なるほど	W 4 4	5	2	2	3	1	2	1	－	2
のちほど	W 3 1	－	－	－	－	－	－	－	－	1
よほど	HA3 2	1	4	2	1	－	－	1	－	1
このほど	W 3 3	1	1	－	1	－	－	－	1	－
それほど	W 3 1	－	－	2	1	1	1	3	－	－
どれほど	W 3 2	－	1	－	1	－	－	－	－	－

これらが問題となるのは，「ほど」が，『現代語の助詞・助動詞』に助詞として

あがっているからであり，しかも，感覚的には自立的でもあるからである。ここにのべるのとおなじ問題を，「こと，もの，ところ，くらい，きり，くせ」もかかえるが，問題の生じやすさにおいて，「ほど」が典型である。報告の8年で自立形式とみとめられたただひとつの例，および1986年で自立形式とみとめた1例は，つぎである。

- と同時に、翌二十五日の攻撃には、還らない決意の**ほどを**示して、つぎのような感傷さえも、もらしていた。　(1956年11月 p.13)
- それは、すなわち平尾に対する周囲の期待の**ほどを**しめしているのだ。　(1986年5月 p.271)

この2例の単独の自立形式「ほど」については，以下では考慮しない。

「ほど」が，例外なく助詞であるのならば，うえにしめしたような語は，見出し語としては存在しえない。そこに例外がみとめられているのは，うえのうち，「身の程」から「よほど」までについては，『現代雑誌九十種の用語用字』の見出し語としてあがっていることによる。『現代雑誌九十種の用語用字』で採用されたβ単位という短い単位の系列で一語であるものが，長い単位の系列で解析されるのは，一般的にいって，論理的に矛盾する。ただし，「ほど」は，『現代雑誌九十種の用語用字』では，助詞ではなく，名詞である。そのかぎりにおいては，あらためて問題にする余地があるが，かりに助詞であったとしても，『現代雑誌九十種の用語用字』の同語異語判別は，助詞・助動詞の接続したかたちをも対象としてなされている。たとえば，「少なくとも，少なくも」などは，形容詞「少ない」(の連用形) とは別の一類として見出し語をあたえられている。

さて，しかし，「このほど」以下は，そのようにならない。『現代雑誌九十種の用語用字』で，「この」などと「ほど」とに解析され，全体で一語としては立項されていないからである。報告および今回の調査では，「ほど」は，単純な通常の助詞とするか，例外的に名詞であるとみとめるかである。もし「ほど」を助詞とするならば，自立形式1個と付属形式との結合を規定する細則

はないので,「このほど」以下の単位設定はあやまっていたことになる。細則5は，個別的なものにかかわる例外規定であるが，他の細則と同様に，自立形式2個以上の結合を規定するものである。名詞とするならば，その細則5，すなわち『新潮国語辞典』に立項されているものは結合形式とするということによって，それでよいことになる。ただし，なぜ名詞とみとめたか，また，つぎの例は,『新潮国語辞典』に立項されているにもかかわらず，なぜ結合形式とみとめなかったのか，別に問題がでてくる。

・僕に**あれ程**堅い約束して、　(1906年10月付録 p. 72)

・近頃の新人は**あれ程**小説の中で傲慢に若さの特権を振りかざしているが　(1956年5月 p. 197)

・…(略)…たからこそ、彼は**あれほどの**気まぐれぶりを発揮できたのである。　(1956年8月 p. 382)

・彼がほとんど独力で**あれほどまで**見事に「洋画ノ奇巧」を自分のものとすることができた、背景には、　(1966年11月 p. 113)

・**これ程の**潮汐も、時、利あらず、　(1916年1月説苑 p. 30)

・**是程之**面目老拙も勤死静も苦死可仕時節、　(1926年4月説苑 p. 27)

・**これ程の**感激は決して受けた事がなかつた。　(1926年11月説苑 p. 76)

・重光リス大臣は**これほど**みじめにこびへつらつて、(1956年6月 p. 213)

「このほど，それほど，どれほど」には一語性がつよいという見解もなりたちうるが，それのみでは，作業の規定のうえで，一語とみとめられないのである。ちなみに，うえの「それほど」は，つぎのようである。

・かうした場合にも大衆が性的な事件その物を**それほど**面白く感じてゐるのでない證拠には、　(1926年7月説苑 p. 92)

・**それほど**倹約［しまつ］に倹約［しまつ］をして、こんなに沢山いゝ着物をこしらへながら、　(1926年11月創作 p. 83)

・しかし私は、先生が**それほど**俳句の事を考へずに渡欧されたとも思へない。　(1936年10月 p. 158)

・なぜ**それほど**夥しく出版者があらはれたか、　(1946年8月 p. 80)

・こういう点を確認した上で　**それほど**競争が行われたから輸出競争が激化したのだというように論證を持つていくのが　（1956年３月 p.175）

・企画庁プロパーの官僚たちは、大蔵官僚や通産官僚と違って財界に**それほど**コネが利かない。　（1966年４月 p.151）

・不況時にも卸売り価格が**それほど**おちこまなかったというところに、　（1966年10月 p.40）

・米政府は、**それほど**、無思慮でもないし、日本の国内情勢や、国内世論に対し、無思慮ではないはずである。　（1966年５月 p.290）

第１例のように副詞としてもよいようなものもあるが，第２例のように，うえの「あれほど，これほど」とおなじく，「それ」の具象性があきらかであるものもある。

1986年については，関係するものとしてつぎの２例があったが，いずれも，「ほど」を助詞として処理した。

・十二歳の夏。**あれほど**いやな季節はなかった。　（９月 p.378）

・たかがラガーメンの復帰に、スポーツジャーナリズムがなぜ、**これほど**騒ぐのかと　（５月 p.271）

なお，このようなこまかい議論ができるようになった背景には，国立国語研究所言語処理データ集３『現代雑誌九十種の用語用字　五十音順語彙表・採集カード』の刊行がある。国立国語研究所には，もとより，その原本があり，それなりに利用に供されてきたのであるが，こうした議論をおこなうにあたっては，公刊されていないことを前提として，ある程度の制約をかんがえざるをえなかったであろう。

つぎに，細則２の例外規定をめぐる問題，すなわち文の認定にかかわる問題について。構文論は，大体において，文のかたちがわかっていることを前提として成立していて，その理論によって，具体的な言語現象を文であるか文でないかと判定することは，まずない。ここにふれる問題は，そうしたところにもかかわっている。1986年の例をあげる。以下，問題とする部分のみについてであるが，「｜」によって語と語との境界を，「＾」によって語におけ

る結合を，それぞれあらわす。

・『新・階層消費の時代』(｜八五年七月｜刊｜、日本経済新聞社）の
(11月 p.60)

「八五年七月刊」は，文の中止句であるとみとめて2語に解析したが，報告の8年では，むしろ文とせずに結合させている。

・東海遊子吟　｜土井晩翠へ著｜
｜大日本図書株式会社へ発行｜　(1906年9月 p.120)

・原始仏教史　｜舟橋水哉へ著｜
｜文明堂蔵版｜　(1906年9月 p.124)

・▲第二十年第十二号（｜十二月へ発行｜）……村上　専精氏
▲第二十一年第一号（｜一月へ発行｜）……下田　歌子氏
▲同　上……海老名弾正氏
▲第二十一年第二号（｜二月へ発行｜）……登張　竹風氏
(1906年7月付録 p.14)

・『哲学と教育』（第四号、｜六月へ発行｜、愛知学芸大学哲学会）は、
(1956年8月 p.223)

・天うつ浪　｜幸田露伴｜著｜
｜梶田半古｜画｜　(1906年2月 広告)

・｜十月｜第一号｜発行｜　(1916年10月 広告)

・｜昭和二十一年六月廿三日｜印刷｜
｜昭和二十一年七月　一日｜発行｜　(1946年7月 p.136)

用言的な部分が末尾にあるから問題になるのであり，たとえば書名にさきだってこのようなものがあるときには，結合形式である。1986年の例。

・｜佐治守夫・へ神保信一へ編｜「登校拒否」　(11月 p.210)

これに類するようなことは，おそらく，ほかにもすくなからずあろうとおもわれる。つぎは，1986年のうちで不統一のようにみえるものである。

・｜パンフレット｜拝送｜
○御予約はお早めに
｜予約へ直通｜
｜03-925-2950｜　(11月 p.43)

・一、締切……昭和六十二年五月三十一日（｜当日消印｜有効｜）
(10月 p.398)

「予約直通」を結合形式とみたのは，すぐあとにつづく電話番号に対して，

いわば主語であると解析したからである。もし，電話番号と順序が逆であったならば，「当日消印有効」のように述語を解析していた。

・｜03-925-2950｜
（｜予約｜直通｜）

このような統一性にかかわる問題は，単位設定規則を充分に適用しているならば，回避できるはずであるが，ひとでにたよらざるをえないこととて，いくたび検査をくりかえしてものこるものと覚悟しなければならないであろう。気づいたときに全体をみなおしてみるというのは，ひとでのみでおこなうことはまず困難であり，コンピュータ処理のできる環境においてのことである。そもそも，規則を機械的に適用して判断するということは，コンピュータ処理にむいているはずであるが，たとえば，文を規定できないような状況では，いまの問題にはたちむかうことができない。そうして，また，規則を適用するについて，あらたな規則が必要とされるばあい，どのように対処するかということも，コンピュータ処理のうえでむずかしいようである。

1986年の調査でそのようなあらたにでてきた問題に，一言ずつながら，二三ふれる。

・一、枚数……｜四百字詰原稿用紙｜五十枚以上｜百枚以内｜
（10月 p. 398）

「五十枚以上百枚以内」を，結合形式とみるか，このように2語に解析するかが，問題である。単位の規則の細則2に，例外規定として「どちらかが5音節以上なら切る」という一項があり，それを利用することもできる。しかし，ここでは，つぎのような，ありうるかたちをかんがえて，きることとした。

・五十枚以上百枚まで

すなわち，この全体が一語であるとすると，見出し語のかたちは，助詞「まで」をのぞいて，「五十枚以上百枚」となり，意味するところが不可解となる。それを回避しようとして，「五十枚以上」を独立させている。同様にありうる，

つぎのかたちに対しても，このきりかたは有効である。

・五十枚から百枚以内

いまあげた，ふたつのありうるかたちで，「五十枚以上，百枚以内」でないほうのかたちの見出し語は，いうまでもないことながら，「百枚，五十枚」である。

・｜昭和61年６月16日へ（月）～へ９月25日へ（木）｜　　（２月 p. 8）

さきに，表記・音の長さのおおきいものとしてあげたひとつである。ここには，問題がふたつある。ひとつは，「昭和61年６月16日」と「９月25日」とを結合させておいてよいかである。「昭和61年」が以下の全体をくくっていると解析するならば，この問題はちいさくなる。ここではそのたちばで結合形式とみなしたが，また，記号「～」をつなぎ符号として評価することもしている。つなぎ符号というのは，つぎの記号「－」のようなものをいい，報告の規定には紹介されていないが，細則２の一部として，その前後をきりはなさないと規定されている。

・｜中曽根－へ金丸－へ竹下を｜結ぶ線が磐石になれば、　（９月 p. 61）

問題のいまひとつは，曜日の表示の処理である。単位の規定の細則６によって，きりだすこともかんがえられないではなかったが，曜日の表示は，補足ないし説明というよりも，括弧でくくるくだんの形式が一般的であろうことにかんがみ，年月日の表示の一部とみたてることにしたのである。報告の８年にてらそうとしたが，例がなく，そのことは意外であった。

・『｜ドキュメント　｜ニュータウン流通戦争』等が｜　　（11月 p. 255）

・第十冊目の「｜法廷風景｜続き｜」以下を｜　　（６月 p. 213）

書名・題名に問題があることは，報告（pp. 21－22）にふれられている。ここの例の前者は単行図書，後者は手記ノートの章の題名である。前者の「ドキュメント」のようなつのがきに類する部分は，主題名とのあいだに字あきがあったり，主題名よりちいさい文字でしるされたりして，主題名とは一線を

画されるのが通常であるとみうけられるので，語としても主題名とはきりはなすこととした。後者の「続き」もそれに準じたが，問題があるかもしれない。もしこうでなければ，「「法廷風景続き」以下を」で一語である。なお，前者の「等（とう）」は，細則2の細部の規定で助詞なみにあつかうことになっているのによって，単独の語としていない。

・田村靖邦（｜福岡＜筥崎宮＜宮司｜・写真右）　　（11月 p.238）

「福岡，筥崎宮，宮司」の3形式の関係は，福岡にある筥崎宮の宮司であり，一般的にいうならば，「福岡」と「筥崎宮」とはきりはなし，「筥崎宮」と「宮司」とはつけておくべきものである。しかしながら，つぎのきりかたでは，「福岡」が「宮司」に関係していると表示しているようにも理解できる。

・｜福岡｜筥崎宮＜宮司｜

それをきらって，「筥崎宮」と「宮司」との結合を尊重しつつ，規則の面からするならば異常であるが，「福岡」をもとりこんでしまっている。

3．2．単位の幅

外来語・外国語の，主としてよみにかかわることに，ふれる。

報告の8年および1986年の調査では，アルファベットないし外国語・外来語のよみかたは，『現代雑誌九十種の用語用字』にしたがっている。しかし，『現代雑誌九十種の用語用字』の40年まえにおいてはよかったであろう，そのよみかたが，いまやふるくなっているとおもわれるものがある。たとえば，「NHK」は，「えぬえっちけえ」のよみをあたえられ，そこにもみられるように，アルファベット「H」は，「えっち」のよみをあたえられるが，現代においては，おそらく，『三省堂国語辞典』が「エヌエイチケー」を見出しとし，また『新潮国語辞典』が「エイチ」を主見出しとしているように，よみかたをかえてよいであろうとおもわれる。もとより，「えっち」であるか「えいち」であるかという程度の問題は，語形のいわゆる「ゆれ」の範囲におさまるものであり，五十音順語彙表を作成するときなどに，影響するにすぎない。た

だし，語「変態」のローマ字がき頭文字に由来するといわれる語「えっち」は，そのかたちでしかありえず，「えいち」とのあいだで同語か異語かの問題をひきおこすかもしれない。

外来語・外国語ではないが，「日本」のよみも，いまのところ，「にっぽん」を優先し，固有名詞などの特別のばあいにかぎって「にほん」をとっている。しかし，このゆきかたは，国語辞典などにてらすときには，むしろ逆である。『新潮国語辞典』では，「日本銀行」のような正式には「にっぽん」であるものも，「にほん」の見出しのもとにまとめている。国語辞典には，語源主義のかたむきがあるかもしれないが，現在の使用の実情も，『新潮国語辞典』のゆきかたでおかしくないものとかんがえられる。

頭文字すなわちアルファベットをつらねて構成された語には，よみの決定のむずかしいものもある。さきに表記・音の長さのおおきい語としてあげた「256キロビットDRAM半導体の」の一部分「DRAM」は，その例である。百科事典・新語辞典などにあたって，「だいなみっくらむ」と「でぃいらむ」とのふたつがあるらしいとまでは理解できたが，いずれをとるかはいわばふんぎりの問題であった。『言泉』は「どらむ」のよみをしめしているが，ほかにこのよみがみあたらず，選択肢からはずした。

現代の朝鮮語・中国語の漢字で表記されたものについては，日本漢字音でよむか，現代朝鮮語・中国語の音に準じてよむか，という問題がある。朝鮮語のほうは，特に最近数年間において，人名の原音よみおよびカタカナ表記が，一般化してきている。中国語のほうは，一方において，ジャーナリズムを中心に相互主義が成立していて，すなわち，中国のがわでも日本の人名などを中国音でよみ，日本のがわでも中国の人名などを日本音でよむ，ということがおおく，他方において，原音よみを主張する意見もあって，複雑である。1986年のばあい，中国人名「毛（沢東）」は，ふたつのよみであらわれてきている。よみをどちらにするかは，当の語のあらわれる記事の全体におい

て振り仮名がどうなっているかで判断し，もし原音よみの振り仮名があれば，原音よみをとり，そうでないならば，振り仮名がないばあいをもふくめて，日本音よみをとっている。中国人名「劉」は，原音よみでも日本音よみでも「りゅう」となりうるが，1986年のばあい，その語のあらわれた記事が全体として原音よみの振り仮名をほどこしてあるので，原音とみなした。さて，この原音よみと日本音よみとは，語種も外来語と漢語とにわかれ，異語とするのが妥当であろう。

単位の幅にかかわることがらとしてふれておきたかったことは，以上である。単位の長さの問題であるが，いま外来語・外国語にかかわったので，最後にひとつふれる。報告には紹介されていない，単位の規定の補則として，「外国語は一文を一単位とする」というのがある。また文がかおをだしているが，ここではかるくかんがえる。1986年では，関係するものとして，つぎがある。

- ｜低温管理システム　｜
  ｜Cooled★＾Winery｜
  ｜サッポロワイン　｜ポレール｜　（10月 p. 203）
- ｜The Blend＾of Nikka｜
  ｜Maltbase＾Whisky｜　（12月 p. 18）
- 〝｜百＾花＾斉＾放，｜百＾家＾争＾鳴〟の｜方法をもって　（10月 p. 233）

最後の例は中国語である。それをもふくめて，単位の規定のしかたがよいか，あらためてかんがえてみる必要があるかもしれない。外国語が，語のレベルのみでなく，文相当のレベルにおいて，日本語のなかにはいりこみつつあることは，現時点では否定しえないようにおもわれる。外国語であって日本語でないから，日本語の調査からはずす，ということも，かんがえかたではあるが，外国語がはいりこんでいるのも，日本語の実情である，ということも，かんがえかたである。外国語の単位の設定という，おそらく外国でも検討されていない問題に，いずれとりくまなければならないかもしれない。

単位の幅あるいは外来語・外国語にふれたこの節において，つぎの感をつよくする。すなわち，変化しつつある言語に，一定の単位をもってどこまでせまりうるであろうか。

引用文献

石井　久雄　1989「一貫処理システム」KAIDOKプログラムの『雑誌用語の変遷』語彙表への適用。CL通信（国立国語研究所言語計量研究部）14。CL研究（同）3　pp. 58－65

石綿　敏雄　ほか　1962・64　国立国語研究所報告21・25　現代雑誌九十種の用語用字(1)(3)。秀英出版

中野　洋　1973　現代日本語における音素連続の実態。国立国語研究所報告49　電子計算機による国語研究Ⅴ　pp. 94－120。秀英出版

永野　賢　1951　国立国語研究所報告３　現代語の助詞・助動詞―用法と実例―。秀英出版

中村　通夫　ほか　1955　国立国語研究所報告８　談話語の実態。秀英出版

林　大　1957　語彙。筑摩書房　講座現代国語学２　ことばの体系　pp. 95－125

水谷　静夫　1982　数理言語学。培風館　現代数学レクチャーズD－３

宮島　達夫　1987　国立国語研究所報告89　雑誌用語の変遷。秀英出版

宮島　達夫　ほか　1982　図説日本語　グラフで見ることばの姿。角川書店　角川小辞典９

横山　昌一　1979　辞書見出し語のアクセントの性質について。日本音響学会昭和54年度秋季研究発表会講演論文集　pp. 497－498

（追　加）
石井　久雄　1990　雑誌における語の長さ。計量国語学17－４　pp. 193－206